

## 山田伸吉関連資料について

黒 澤 暁

2022年に大鴨律子氏より山田伸吉の作品2点を新たに寄贈いただいた。この2点の新収蔵資料を紹介するとともに、関西大学なにわ大阪研究センターの山田伸吉関連資料について紹介したい。

山田伸吉は、大正12年（1923）松竹座落成の前年に松竹合名会社に入社したとされ、入社後は松竹座を中心として舞台背景や映画のポスターなどの作品を多く手掛けた人物である。当時、松竹座のある道頓堀は江戸時代から続く芝居町としての風情を残しながらもモダンな町へと変貌する時期であった。まさに山田伸吉は、道頓堀が新たな町へと変化する中に生きた人物である。

その山田伸吉の関連資料が、当センターに多く所蔵されている。2011年に山田伸吉関連資料を購入したことがきっかけとなり、センター主催の道頓堀フォーラムや「大阪くらしの今昔館」での展示を行った。こうした取り組みを通じて、山田伸吉の長女加藤永子氏とその子息加藤雅氏とご縁を結ぶことができた。これによって、加藤永子氏より山田伸吉の油彩画・デッサン・下絵・版木・図書・書簡など山田伸吉ゆかりの資料をご寄贈いただき、ほぼ完全な形で収蔵することができた。

山田伸吉の収蔵品は、松竹座の芝居画を中心にポスターや挿絵、油彩画、日常生活を思わせる愛用品や書簡などがある。芝居画は「仮名手本忠臣蔵」「助六由縁江戸桜」といった歌舞伎の演目のものもあれば、洋館や海外の町並のものもある。また左右に紫の像を配したものや花が絢爛に描かれる鮮やかなものはレビューの背景であろうか、多岐にわたる芝居画を手掛けている。また油彩画は、山田伸吉が西洋画家を目指していたことをうかがい知ることができる。特に油彩画は、荒縄や目の粗い布を絵に貼付けて着色した作品がいくつもみられる。油彩画に荒縄や布を用いることでざらざらとした質感があり、油彩画での山田伸吉の試みと考えられる。さらに、書簡からは小説家の長谷川幸延とのやり取りも見られ、山田伸吉が長谷川幸信の作品の装幀を手掛けたというだけでなく、長谷川幸延が山田伸吉の生活や画業に深く関わっていたことを知ることができる。

なお、山田伸吉の芝居画を中心とした画業については『山田伸吉の生涯と画業』（大阪都市遺産研究叢書別集9、関西大学大阪都市遺産研究センター、平成27年3月）にまとめられている。しかし、油彩画への取り組みや書簡からうかがえる人的交流などについては、今後も調査する必要がある。

当センターの展示や刊行物による研究成果によって、2022年に新たな山田伸吉の作品を寄贈していただくことができた。寄贈いただいた作品は、以下の2点である。

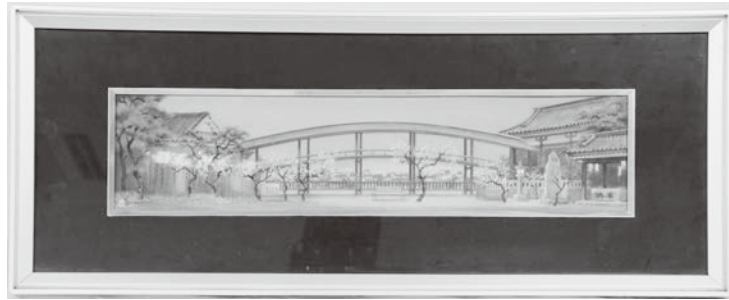
①芝居画「湯島の白梅」29.8×75.0センチ（額込み）

②油彩画「バラ」26.3×20.0センチ（額込み）

寄贈者の大鴨律子氏によると、寄贈者の父と山田伸吉に交流があり、寄贈者宅に訪れたこともあるという。山田伸吉没後も、ご自宅では季節に応じてこれらの絵を掛けて鑑賞していた。寄贈者の父の没後に所持品の整理をするうえで、山田伸吉の顕彰に役立ててもらいたいと寄贈先を探された結果、当センターでの山田伸吉に関する取り組みを知り、今回の寄贈に至った。

今回、寄贈いただいた「湯島の白梅」は、泉鏡花の小説『婦系図』を原作とした演劇作品である

う。中央にはベンチがあり、湯島天満宮に掛かる橋の向こうの家々には電灯がともっているのか家の中が明るい。さらに煙突が見られるなど現代的な背景となっている。なお、すでに収蔵している油彩芝居画「湯島」（前述『山田伸吉の生涯と画業』86頁掲載）も湯島天満宮の境内を描いているが、人物の有無や灯籠・紅梅の位置に違いがあり、実際の公演記録との考証するうえで、寄贈いただいた資料は重要な作品となる。



芝居画「湯島の白梅」

油彩画『バラ』は、中央に緑の花瓶に生けられたバラが荒縄を使って描かれており、山田伸吉の油彩画の特徴が見られる。落ち着いた色彩で描かれたこの絵は、寄贈者のご自宅で日常に彩りを加えていたことがうかがえる作品である。また、油彩画家としての山田伸吉を考えるうえでも、山田伸吉の交流を考えるうえでも貴重な資料といえる。



油彩画「バラ」

以上、新たに寄贈いただいた山田伸吉作品を紹介した。山田伸吉については、松竹座を中心とした芝居画家として知られているものの、油彩画家としての側面や彼の画業を支えた人的交流については、今後も研究が必要である。今回紹介した新収蔵資料を含む山田伸吉関連資料は、2023年公開予定のデータベースへ入力完了しており、今後の山田伸吉研究の一助となることを願うばかりである。

(くろさわ さとり 関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程)